

## 第五七〇回 一二月一四日(金)

## 東洋文庫所蔵モロッコ皮紙契約文書から

## 見る不動産の売買と相続

東洋文庫研究員 佐藤 健太郎  
北海道大学准教授

東洋文庫には、皮紙に記されたモロッコのアラビア語契約文書が計一九点所蔵されている。一六世紀から一八世紀にかけてフェスやメクネスといったモロッコの古都で作成されたもので、いずれも家屋や農地などの不動産取引を扱っている。

東洋文庫西アジア研究班では、二〇〇九年から三浦徹氏(お茶の水女子大学)をリーダーとし、原山隆広氏(東洋文庫)、吉村武典氏(大東文化大学)、亀谷学氏(弘前大学)、そして佐藤の計五名によつて、この皮紙文書の共同研究を進めてきた。その成果の一部はすでに「MURA Toru & SATO Kentaro, eds., *The Tellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries*, Tokyo: Toyo Bunko, 2015」として刊行されている。今回の講演では、これまでの研究成果にもとづいて、前近代のモロッコにおける契約文書作成について概略を説明したうえで、東洋文庫所蔵文書から垣間見える不動産取引をめぐる人間模様を紹介した。

これらの皮紙文書では、一枚の料紙の中に数件から十数件の証書が記されている。これら複数の証書はその全てが一時に記されたわけではなく、各証書の日付は数年から数十年(長いものでは百年以上)にわたっている。皮紙の料紙は片面のみを使用しているものもあれば、次々に証書を書き足していく過程で裏面にまで及んでしまったものもある。証書の内容は、いずれも何らかの形である特定の不動産の所有権に関連しており、一種の権利証書としてその不動産の所有者が手元に保管していたものだと考えられる。なお、皮紙文書が東洋文庫に到着した際には、最初の証書が書かれた面を内側にして短冊状に折りたたまれており、

外側には標題として不動産物件の名称などが記されていた。おそらくは、保管に便利なように小さく折りたたんでいた。おそらくは、保管に便利なように小さく折りたたんでいた。で、整理・検索がしやすいように標題を記しておいたのである。

皮紙文書に記されている各証書の末尾には、多くの場合、二つの署名が記されている。これらは、アラビア語でアドルと呼ばれる公証人たちの署名である。イスラーム法においては一定の証人資格を備えた二名の口頭証言により事実認定がなされる。そこで契約にあたっては、あらかじめカーデー(裁判官)から証人資格を認められた公証人二名が立ち会い、彼らが契約内容を一定の書式に則って証書とし

て記録するとともに、必要時に契約内容の真正さについて口頭証言がえられることを担保することが、古くからイスラム世界各地で行われていた。フェスの公証人は二人一組で開業していたことが知られているが、東洋文庫の皮紙文書はこのような二名の公証人が作成して署名を付したものである。

皮紙文書に記された複数の証書を検討していくと、不動産売買の記録を証書化する際のプロセスが見えてくる。例えば、皮紙文書Vには計一五件の証書が記されているが、そのうち一件の証書が、フェス市街の北部ジーサ門近くの廃屋と地所の購入証書（証書V5）となっている。しかし、この購入証書単独では、物件の新たな所有者となった買い手の権利を示すに十分ではなかったようである。皮紙文書には購入証書とともに、売り手が物件の正当な旧所有者であったことを示す証書や物件の価格査定証書など四件の関連証書（証書V1―証書V4）もあわせて記されている。これらがあつてはじめて購入契約の適切さと、ひいては買い手の物件に対する所有権を十全に示すことができるのだと思われる。

これらの関連証書の中には、旧所有者たる売り手がいかにして当該物件の所有権を得るに至ったかを示す、何年も前の証書の写しも含まれている。もともと別紙に書かれて

いたこれらの関連証書を集めてその写しを作成するには、相当の時間を要しただろうが、その際に重要な役割を果たしたと考えられるのが公証人二名である。先ほどの廃屋と地所の購入契約においては、四件の関連証書のうち、三件の証書に購入証書と同一の署名二点が記されており、残り一件の証書でも署名一点が購入証書と同一である。したがって、関連証書を作成した公証人二名と購入証書を作成した公証人二名とは、ほぼ同一のペアということになる。おそらく彼ら公証人は、単に売買契約に立ち会って購入証書を作成するのみならず、その専門的な知識を生かして、どのような関連証書が必要か契約当事者に助言し、その写しを作成するなどの、一連の手続きを一括して請け負っていたのであろう。

講演の中では、このほかに、相続を繰り返すことにより生じる財産所有権の細分化への対処（前述のジーサ門の廃屋は八回の相続の結果一四名によって共有されるに至る）や、スーフィー教団による不動産投資とその経営（前述の廃屋と地所はスーフィーのマアン家により購入され圧搾所という収益をもたらす物件に生まれ変わる）といった、皮紙文書からうかがえる前近代フェス社会における不動産をめぐる具体的な諸相も扱った。しかし、紙幅の都合もあるのでここでは割愛する。

一五件の証書が書かれた皮紙文書V

